



印度 西天之論家  
中夏 日域之高僧  
顯 大聖興世正意  
明 如來本誓應機  
如來本誓應機 我等にありと明します

「お正信偈」は百二十句からできていの親鸞さまの「うた」ですが、大きく分けて二つの部分に分けることができます。

第一の部分はお釈迦さまのお説きになつた「大無量寿經」によつて、私たちの眞実の如來さまのことをおたゞえになりました。そしてこの「印度西天之論家」からあとの部分は、その如來さまの眞実をお説きくださつたお釈迦さまのみ教えを、いまの私にまで、大切に伝え伝えてくださつた方々のうち、とくに七人の高僧についての教えを、一つ一つあじわいたたえておられる部分です。

第一の部分を「依經段」、第二の部分を「依釈段」と昔の人はよびならわしてきました。この部分の意味を通解しておきます。

はるか西の國印度に出られた二人の論師として中国日本と次々にお出ましになつた高僧がた、それらの方々はただひとすじに、お釈迦さまがこの世におでましくださつて本意はなんであつたのかということを明確にしながら如來さまのかけがえのないねがいといふのは実はほかならぬ私のためであつたのだといふことを明らかにくだされたのです。

まず「機」ということばから考えてみるとしましよう。「機」というのは「人間」のことと言う仏教用語です。

なぜ人のことを「機」とよぶのかと申しますと、それは「機関」の意味からそうよぶのだと言うのです。「機関車」のあの「機関」のようなのが私という「人」のありかただというのです。

「機」は「はずみ」という意味です。「機」といふのは「かかわり」ということです。私という人間は、ちょっととしたはずみによつてかわつてしまします。ある人のちよつとしたことばがはずみになつて生れかわつた人生をひいた人もいます。悪い友だちさそいで一度乗つたことをはずみにして転落してゆく人もいます。

いろいろな人との「かかわり」（縁）のなかで、それを「はずみ」にしながら生きている「人間」という意味で、仏教では「私」のことを「機」とよぶのです。

そう考へてみると、いま「私」がこうしてお念仏に出会えているということは、なみなみでないこ縁なのだと思いますにはおれません。

私のしぶといのちで、いろいろな「かかわり」をもつてくださつた方々・私にさえお念仏の方向に「はげみ」をつけてくださつた方々の並々でないこ縁ご恩を思わずにはおれません。もしその方のこの教えがなかつたらと、お念仏のなかでその人人のご恩をたたえたのが、この「正信偈」です。

八月のこよみ	
一 日	「勝林寺寺報」発行
二 日	永井勝正氏宅基参・金久三郎氏宅法事
三 日	小田「連研」
四 日	植田正一氏宅法事
五 日	昭氏宅法事・山田武雄氏宅法事・成田捷明氏宅祥月
六 日	東矢光郎氏宅法事
七 日	正法寺追悼会・数森弘道氏宅法事
八 日	お盆参り
九 日	お盆参り
十 日	お盆参り
十一 日	お盆参り
十二 日	石坪久男氏宅初盆・谷垣逸雄氏宅初盆
十三 日	多田正夫氏宅初盆・永井勝正氏宅初盆
十四 日	出石町お盆参り・斎木義信氏宅初盆
十五 日	中島明美氏宅初盆・横山柳乃氏宅初盆
十六 日	中川信氏宅初盆
十七 日	斎藤庄治氏宅初盆・斎藤自信氏宅初盆
十八 日	島根瑞泉寺墓参
十九 日	岸下夷氏宅初盆
二十 日	前々住職祥月命日
二十一 日	田村郡雄氏宅法事
二十二 日	勝林寺盆会
二十三 日	斎藤庄治氏宅初盆
二十四 日	多田正夫氏宅初盆・斎木義信氏宅初盆
二十五 日	前々住職祥月命日
二十六 日	仏婦ブロック研修会（豊岡光行寺）
二十七 日	斎藤庄治氏宅法事
二十八 日	兵庫教区同推委員会（神戸）
二十九 日	前々住職祥月命日
三十 日	「みのりを聞く会」

## 第十七回 一もど子泊研修会

「お念仏の子を育てよう」という願いから、勝林寺仏婦が毎年おこなつておかるさんもいつしょに参加してみませんか。

「お念仏の子を育てよう」という願いから、勝林寺仏婦が毎年おこなつておかるさんもいつしょに参加してみませんか。

佛婦の役員様は十六日迄に出席人数をご報告下さい。

料理物があればお願いします。

千秋さんのバス送迎奉仕もあつて昼夜とも講堂のお参りでした。信楽先生のご講話も感銘深いものでした。○「安居」十四日間で門徒に何の事故もなく無事に勤めさせていただきました。有難いことでしかれました。今年度は特に組織の拡大とともに他の教化団体（仏婦）との協力関係向上に努力することがうち出されました。○八日九日永代經には宮島千秋さんのバス送迎奉仕もあつて昼夜とも講堂のお参りでした。信楽先生のご講話も感銘深いものでした。○二十七日八日、婦人総参拜ということで坊主と仏婦会長宮島美重子さんがじ本山へお参りしました。お裏様や絵巻などとの話し合いは有意味なものでした。○三十一日平田の専福寺で今期第二回目の「連研」がありました。猛暑のなか九時から四時半まで七十名の研修員真剣そのものの研修でしたことに勝林寺住職の二時間休みなしの「仏教」の講話には全員少々ヘキエキ気味であつたとか。○一日遅れてしまいました。おわびします。

## まことのとば



「是の眼は則ち自からその己体を見ること能わず」（眼は、ほかならぬ自分自身を見ることがない）

このことばは、ナガールジユナ（龍樹）という方の書かれた「中論」に出ていています。

「眼は自から見ない」と言いなおしてみたらよくわかるかもしません。

私は、今年六月九日、京都市立病院で眼の手術をしてもらいました。

手術そのものはうそのように簡単でしたし、術後十日も立たない内に退院させていただきました。しかし、それから十日か二週間おきに通院して何回かかかつて糸を抜いてもらつたり検診したりしてもらっています。経過は順調だということです。九月のはじめにコンダクトを入れてやろうと言つてくださいました。

「充血もとれて、きれいになつたでしょ」

「おおかた糸もとれて、見やすくなりましたね」

などと先生は親切に言つてくださいます。

先生の親切なおことばですか、「ええ」とか

「おかげさまで」とか「ありがとうございます」などと返事はするのですが、実は、私は、私の眼の充血がどれほどとれたのやら、どんなにきれいになつてきたのやら、実はさっぱり見えはしないのです。

そのとき私は、前にあげた「中論」のことばを思い出したのです。  
「眼は自から見ない」  
もし、コンダクトを入れてもらつても、外の物は見えても、眼は、ついに自分自身が見えないのだなと思ひました。

「盲」という字は、このよう自しか持つていな

人のことばかりあれこれ目について、自分を見る

目を亡くしてしまつて、いる「盲」の私を、如來さまは「世の眞冥を照すなり」（ご和讃）とおつしやつてくださつてあるのだなあと思はさしていた

だきました。

それから「盲」と同じよう、私の機さま生きざはを言うことばに、「闇」というのがあります。「闇の世」「闇の人世」など、ご和讃にも「三塗の黒闇」というように使われております。「闇」という字は、音が門がまえの中に閉されていることをあらわします。

「音が聞こえなくなつた世界」です。  
「正しいことばの失なわれてゆく社会」。  
「真実のことばが聞かれなくなつた世の中」のことです。

いま私たちは、声をうしないかけております。

いつたい、自分のほんとの声はどれだろうと混乱におちいつております。

テープに録音して聞いてみると、これがほんとの私の声かとおつかなびつくりです。素人カラオケだつて専門歌手だつて、いまや、自分の肉声は没にして、マイクを通して機械で作り出される声を問題にするようになつてしましました。

まさしく「ほんものの声が失なわれている世界」せんか。

チいうのは、私がよんでもやる自分の名前なんです。

アツチヤンといふ。なにするときも私をよぶとき。

A子さんは例の通り明るく笑いましたが、私は

胸がつまつてしましました。

真実を見ることができず（無明・盲）真実の

ことばを失つてしまつた（黒闇）の世です。

あゝ、「闇」「闇の世」とは、このように、真実の声、まことのことばの失なわれてゆく私たちのくらしのさまを言つたものでした。

それが南無阿弥陀仏のお名号、お念佛です。

私につけられてある「名前」は、たゞ單に、他人と区別するための符号ではありません。

それは、私のいのちにかけられた私の親の顔

いなのです。

産れ出る前から、産れ出てくるわが子のゆく

すえをねがつて、親心のありつだけをつけてくれたのが私の名前です。

そのもつたない名前を、勝手な都合や、うらしないなどで、簡単に変えてしまうというのはどういうことでしようか。

「勝林寺寺報」昨年十二月号で紹介した「A子先生のこと」を、もういちど読んでみてください。

「勝林寺寺報」ために、ただ一つある真実の

ことば南無阿弥陀仏。

「あつちやん、あつちやん」と親心いっぽい願

いっぽいによんでくださる如来さまのよび声。

そして、その同じことばでこの子は「アツチ」と母をよびます。

「南無」は「帰命」であり、「帰命」は「帰セヨ

ノ命」であると同時に「命ニ帰スル」親と子との

よび合うことの出来る、通じ合うことの出来る

まことのことば」なのです。

「南無」は「帰命」であり、「帰命」は「帰セヨ

ノ命」であると同時に「命ニ帰スル」親と子との

よび合うことの出来る、通じ合うことの出来る

まことのことば」なのです。

「南無」は「帰命」であり、「帰命」は「帰セヨ

ノ命」であると同時に「命ニ帰スル」親と子との

よび合うことの出来る、通じ合うことの出来る

まことのことば」なのです。

「南無」は「帰命」であり、「帰命」は「帰セヨ

ノ命」であると同時に「命ニ帰スル」親と子との

よび合うことの出来る、通じ合うことの出来る

まことのことば」なのです。

